

街を行く

第96回 リトルイタリー&チャイナタウン Little Italy & Chinatown

映画の様な趣があります

NYで最も喧騒を極めるマンハッタン。そのダウンタウンの一角にあるのが、ともに有名で歴史ある移民街「チャイナタウン」と「リトルイタリー」です。この2つは、なんと隣り合わせに接しています。どちらが先に発祥したかは別として、町並みや雰囲気ではリトルイタリーに軍配が上がりそうです。

さて、読者の皆さんはこの2つの街から何を思い浮かべますか？「マフィア」と答えた人はおそらく小生だけではないはずです。映画の影響が強いと思いますが、例えば「リトルイタリー」は、フランス・コッポラ監督の「ゴッドファーザー」を連想しますよね。シリーズ2作目（ゴッドファーザー Part II）では、シチリアから移民として海を渡ったヴィトー・コルネオーレがこの街で名を馳せ、ファミリーを築いて裏社会を牛耳るまでの回想録が描かれています。ヴィトーが地域の悪徳な元締めを暗殺する場面で催されていたキリスト教のお祭り（サン・ジェナーロ祭）は、現在も続いています。街の通りを歩くと、ヴィトー役を演じたロバート・デ・ニーロが出てくるような錯覚を覚えます。

一方、「チャイナタウン」に関連する映画といえば、マイケル・チミノ監督の「イヤ・オブ・ザ・ドラゴン」が有名です。これはNY市警とチャイニーズマフィアの攻防を描いた物語で、シチリアマフィアとは違った意味でファミリーを大切にしているチャイニーズマフィアが描かれました。ちなみに、マフィアのボスを演じた俳優のジョン・ローンがかっこよかったですよね。

映画の世界はさておき、これら移民街



隣り合わせでも雰囲気がまったく違う「リトルイタリー」(左)と「チャイナタウン」(右)

を歩いていると、実際にその国の下町を歩いている気分になります。英語以外の言葉が飛び交っている場所ですから、自然とそうした趣がでてくるのかも知れません。その意味で言えば、言語とはまさしく文化なのですね。

街並みや雰囲気ではイタリーでしたが、“勢い”で比べてみると、どうもチャイナの方に軍配が上がりそうです。現に、チャイナタウンがリトルイタリーを浸食しはじめています。イタリアンレストランに囲まれてチャイニーズレストランが堂々と営業しているのです。一見すると仲良く共存しているように見えますが、人を押しつけて歩かなければならないチャイナに比べて、イタリーは少し寂しい印象がありました。これは国力と繁栄の差なのでしょうか。海外の出先はその時代の本国の国パワーが明確に出てしまいます。

各地にある日本人街（リトルトーキョー）は昔のような賑わいがありません。時

代が違うので過去のコミュニティを利用する人がいなくなっているのも事実です。アメリカは移民の国です。いまだにこの国には根深い人種問題があります。解決が非常に難しい問題ではあるのですが、自由が謳い文句の国ですから、今の移民政策は歴史を否定することになりかねませんよね。移民が国の繁栄を作り出してきたのは事実ですから。ビバ・アメリカ！

南 一 弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発(旧松下興産)の代表取締役役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役役に就任。